

崇拜の価値
~聖枝祭のメッセージ~
ポー・スターン・ブレイディ
2024年・3月・24日

先週、イースターの準備として、私たちはヨハネの福音書の最初の節を見て、ヨハネが私たちの世界におけるイエスの人格と目的についてどのように驚嘆の絵を描いたかについて話しました。イエスは人類の歴史の舞台全体に大きく書かれた愛です。

さて、聖週間に入るにあたり、私たちはヨハネの福音書をさらに深く読み進めていきます。ヨハネが友人であるイエスの人生を私たちに理解してもらいたいと望んでいるすべての方法に目を光らせましょう。また、ヨハネがテキストの中で私たちに投げかける質問、つまり私たち自身の人生、私たち自身の目的、そして私たちの心の状態についての質問にも耳を傾けましょう。私たちはヨハネ12章に向かっていますが、まず少し回り道をして、ヨハネ書の興味深い道を見てみたいと思います:

ヨハネ2:4 イエスの母マリアは「ぶどう酒がなくなった」と言います。イエスは彼女に答えます: "イエスは母に言われた、「婦人よ、あなたは、わたしと、なんの係わりがありますか。わたしの時は、まだきていません」。

ヨハネによる福音書 2:4 口語訳

ヨハネ7:30 イエスは神殿の境内で教え、多くの人々を激怒させました: "そこで人々はイエスを捕えようと計ったが、だれひとり手をかける者はなかった。イエスの時が、まだきていなかったからである。"

ヨハネによる福音書 7:30 口語訳

ヨハネによる福音書 8:20口語訳 "イエスが宮の内で教えていた時、これらの言葉をさいせん箱のそばで語られたのであるが、イエスの時がまだきていなかったのも、だれも捕える者がなかった。"

ヨハネによる福音書 8:20 口語訳

これらの聖句は、これらのページで起こっていることは完全に意図的であることを理解するのに役立ちます。神は、御子が人類に、そして人類を通して旅する状況をコントロールしていないことはありません。ですから、これから読む出来事は常に神の計画の中にありました。人類が墮落し、救いを必要とした瞬間から。イブが誤った選択をした瞬間から...イスラエルの民が他の神々に背を向けた瞬間から...モーセが岩に話しかける代わりに岩を叩いた瞬間から...サムソンがデリラに秘密を売った瞬間から...イスラエルが王に救いを求めた瞬間から...ダビデがバテシバを見た瞬間から、神の民がバビロニア人、ペルシャ人、ギリシャ人、ローマ人の捕虜になった瞬間から...神は常に計画を持っていました。彼らの救済、私たちの救済のための舞台は整えられています。そして、父なる神は、私たちがこの世界を変える週を歩むのを見なが

ら、御子であるイエスをリアルタイムで計画の中に入れていと信じています。それでは、実際のテキストを読んで、ヨハネとイエスが私たちに何を伝えたいのかを見てみましょう:

”過越の祭の六日まえに、イエスはベタニヤに行かれた。そこは、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロのいた所である。イエスのためにそこで夕食の用意がされ、マルタは給仕をしていた。イエスと一緒に食卓についていた者のうちに、ラザロも加わっていた。その時、マリヤは高価で純粋なナルドの香油一斤を持ってきて、イエスの足にぬり、自分の髪の毛でそれをふいた。すると、香油のにおりが家にいっぱいになった。”

ヨハネによる福音書 12:1-3 口語訳

マリヤは、イエスが自分にとってどれほど価値があるかを示しています。すべてです。この物語のどこにも書かれていないものは何でしょうか。イエスが彼女にこれを頼んだという証拠はありません。彼女はただそれを注ぎます。彼女は自分の貯金をイエスへの崇拝に浪費します。他の福音書には、彼女がイエスの頭にもそれを注いだと書かれています。これは香水の贅沢な浪費であるだけでなく、多すぎます。(レストランで、香水をつけすぎている人のブースの隣に座っていたので、私は立ち去らなければなりません。私は食べ物の味がしませんでした。これは圧倒的な香りで、長い間残っていたでしょう。)

”弟子のひとりで、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダが言った、「なぜこの香油を三百デナリに売って、貧しい人たちに、施さなかったのか」。彼がこう言ったのは、貧しい人たちに対する思いやりがあったからではなく、自分が盗人であり、財布を預かっていて、その中身をごまかしていたからであった。”

ヨハネによる福音書 12:4-6 口語訳

彼は自分のためにそれを欲しがった。彼は奇妙な崇拝泥棒だ。私の周りではそういう人はたくさんいる。時には、目に見えない神を目に見える形で崇拝するのは馬鹿げていると考える実際の人々もいる。たいていは、それほど明白ではない。恐れは崇拝泥棒だ。「私にはこれを捧げる余裕がない」。疑いは崇拝泥棒だ。「神がこれに値するかどうかわからない」。忙しさは崇拝泥棒だ。「こんなことに時間を無駄にしている暇はない」。

“イエスは言われた、「この女のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それをとっておいたのだから。貧しい人たちはいつもあなたがたと共にいるが、わたしはいつも共にいるわけではない」” ヨハネによる福音書 12:7-8 口語訳

さて...出来事が盛り上がり始めるのがわかります。(「彼女を放っておいて」- ここでイエスは「立ち去れ」または「あなたは解雇される」という意味の言葉を使っています。)この香油の注ぎは、マリヤの心の願いだけではなく、イエスは「意図されていた」と言います。意図されている = 終わりを念頭に置いた目的。最初から、マリヤがこの油の壺を手に取り、生きている主に彼の死のために油を塗ることが常に意図されていました。彼女がそうするだけでなく、それは途方もない量になるだろうと。そして彼女はタオルをつかまず、髪を使います。それは非常に深い謙虚さと服従の行為です。彼女はそれが彼の死のためであることを知りません。聖週間のす

すべての出来事は、この個人的な親密な礼拝行為によって動き始めたようです。この行為は、1分後に別の行為と対比されます。その行為は騒々しく、混沌としていて、視覚的にも素晴らしいものです。しかし、この特別な瞬間、この神聖な犠牲の行為、イエスが自ら言うとおりの存在であるという絶対的な信念のためにすべてを捧げる行為、身を低くしてこの尊敬と謙遜の立場からすべてを捧げる行為は、息を呑むほどです。私はこう考えます。私の礼拝はどこへ向かうのでしょうか。私たちの礼拝の中には、要塞を破壊したり、目に見えない目的を達成したりする何かがあるのでしょうか。(また、私は、私の人生における礼拝泥棒に「あなたは解雇です」と一言で立ち向かうという考えが本当に好きです。)

”大ぜいのユダヤ人たちが、そこにイエスのおられるのを知って、押しよせてきた。それはイエスに会うためだけでなく、イエスが死人のなかから、よみがえらせたラザロを見るためでもあった。そこで祭司長たちは、ラザロも殺そうと相談した。それは、ラザロのことで、多くのユダヤ人が彼らを離れ去って、イエスを信じるに至ったからである。その翌日、祭りにきていた大ぜいの群衆は、イエスがエルサレムにこられると聞いて、しゅろの枝を手にとり、迎えに出て行った。そして叫んだ、「ホサナ、主の御名によってきたる者に祝福あれ、イスラエルの王に」。イエスは、ろばの子を見つけて、その上に乗られた。それは「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、あなたの王がろばの子に乗っておいでになる」と書いてあるとおりであった。”

ヨハネによる福音書 12:9-15 口語訳

大群衆 = 過越祭。これは、すべてのユダヤ人とその他大勢の人々が過越祭を祝うためにエルサレムに集まる時期です(説明してください)。この1週間で、エルサレムの人口は4万人から24万人に膨れ上がりました。狂気と混沌が起こり、ローマ人は不安になりました...多くの人々が一か所に集まると、独立の考えが浮かび、反撃を始めるかもしれないと。彼らは街を兵士で満たし、帝国の代理としてエルサレムを統治していたピラトは、何千人もの兵士と角笛を鳴らし、旗を振りながら、儀式的に乗り込みました。

しかし、イエスは...ロバです。ヤシの枝です。(詩篇 118)「ホサナ!」は「私たちを救ってください! 私たちを救い出してください!」という意味です。これは、非常に必要そうに思えても、礼拝でもあります。礼拝は神がどのような方であるかを教えてくれ、また、私たちがどのような方であるかを明確に理解するのに役立ちます。私たちは神を必要とする者です。神なしでは、私たちは絶望的で無力です。私は、助けることができると思う人だけに「私を救い出してください!」と言います。私は、自分が救われるはずがないとわかっているときだけ、「助けて!」と言います。

このパレードは、奇妙で地味に思えるかもしれませんが、また別のドミノ倒しです。イエスが誰なのかというパズルにピースを追加し続ける、もう1つの出来事です。ゼカリヤは、メシアはロバに乗ってエルサレムに入城すると言いました。ヨハネは言います。「これが証拠です。」しかし、彼はまた、自分と友人たちはそれを理解していなかったとすぐに付け加えます...

”弟子たちは初めにはこのことを悟らなかったが、イエスが栄光を受けられた時に、このことがイエスについて書かれてあり、またそのとおりに、人々がイエスに対してしたのだということを、思い起した。また、イエスがラザロを墓から呼び出して、死人の中からよみがえらせたとき、イエスと一緒にいた群衆が、そのあかしをした。群衆がイエスを迎えに出たのは、イエス

がこのようなしるしを行われたことを、聞いていたからである。そこで、パリサイ人たちは互に言った、「何をしてもむだだった。世をあげて彼のあとを追って行ったではないか。」ヨハネによる福音書 12:16-19 口語訳

その瞬間、弟子たちにとって、このすべてがわくわくして素晴らしいものに思えたに違いありません。ついに、全世界が彼らが見ているものを見るようになりました。全世界が、イエスが彼らが見つけた通りの人物であると信じ始めており、それはイエスのイスラエルに対する統治と統治がすぐそこまで来ていることを意味します、そうでしょう？ しかし、イエスはもっとよく知っていました。イエスは何が起こっているのかを見て、崇拜の叫びを聞き、揺れる椰子の枝から吹くそよ風を感じます...しかし、24時間も経たないうちに、彼は自分の上に注がれた香油の香りもまだ嗅ぐことができますでしょう。彼は、自分が死のために塗油されており、数日のうちに、この群衆の多くが彼に冠を授けたり、殺したりするであろうことを常に思い出しています。

イエスは、私たちが気まぐれで、気難しい、もろい存在であることを知っています。私たちの礼拝が心に残ることもあれば、残らないこともあることをイエスは知っています...しかし、礼拝は必ずイエスに残ります。イエスは聖週間に入り、その仕事のために聖別されます...礼拝と犠牲、そしてイエスがいかに善良であるかを知る人々の愛によって聖別されます。この同じ時期に、善良なユダヤ人は過越祭で犠牲にする子羊を選んでいきます。そしてイエスは、勝ち誇った支配者としてではなく、私たち全員のために自ら屠られる子羊として彼らの中に入って来ます。

さて、祭りの礼拝に上って来た人々の中に、ギリシア人が何人かいました。彼らはガリラヤのベツサイダ出身のフィリポのもとにやって来て、ある願いを言いました。「先生、私たちはイエス様に会いたいです。」フィリポはアンデレのところへ行ってそのことを伝え、アンデレとフィリポはイエスにそのことを伝えました。

弟子たちはついにバックステージのVIPパスを持つクールな子供たちになりました。ギリシア人でさえ、彼らの男に会いたがっています。そこで彼らはイエスのもとにやって来ます。「おい、人々があなたを求めているんだ！彼らはあなたを信じたいと思うかもしれないよ！」この瞬間が弟子たちにとってどのように展開するかとイエスにとってどのように展開するかの違いに、私はどうしても納得できません。

イエスは答えた。「人の子が栄光を受ける時が来た。よくよくあなたがたに告げます。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままです。しかし、死ねば、多くの種を生じます。ヨハネ12章:

彼らがギリシア人との出会いについて尋ねると、イエスは「その時が来た」と答えました。

結婚式とワインを覚えていますか？時はまだ来ていません。時はまだ来ていません。時はまだ来ていません。

そして今。すべてが上向き、右向き。崇拜の匂いが肌に漂う: その時が来た。

最後のドミノが倒れようとしています。弟子たちは、イエスが実際に王座に就く時が来たことを意味すると考えるかもしれませんが、イエスは彼らにヒントを与えます。種は落ちて死ななければ、実を結ぶことはできません。来週のイースターの日曜日、私たちはまさにその聖句を取り上げます。落ちて死んだ種は、私たちが生きるために死んだのです。イエスが育てている庭と、その中での私たちの居場所について見ていきます。

しかし今日、私たちは礼拝します。主が私たちに与えてくださった贈り物の美しさに対して、私たちは主に賛美を捧げます。人の子が栄光を受ける時が来ました...こここの部屋で、主が与えてくださった贈り物と、主が払われた代価に対して。主について私たちが知っていることと、知らないことに対して。主の美しさと、主がなされる美しさに対して。